

## エステル記4章13-14節 「この時のため」

### 1A 民族危機の時

### 2A 機会の時

### 3A 決断の時

### 4A 決心の時

### 5A 今の時

## 本文

エステル記 4 章 13-14 節を開いてください。私たちはエステル記の通読を始めましたが、午後は 4 章から 7 章までを読みたいと思います。今朝は、4 章 13-14 節に注目しますが、エステル記全体の中心テーマになります。

13 モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。14 もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」

「この時のため」という言葉です。口語訳では「このような時のため」、新共同訳では「この時のためにこそ」となっています。英語は”Such Time is This”、「このような時にこそ」となるでしょう。

私たちはバビロン捕囚後のユダヤ人の歴史を、エズラ記、ネヘミヤ記、そしてエステル記で学んでいます。それぞれが、私たちに関わる内容であり、エズラ記は「神の民の建て直し」でありました。バビロンによってエルサレムが破壊されてしまったが、帰還して神殿の神殿を建て直すところから、私たちが神の民として建て直される恵みがあるということ学びました。それからネヘミヤ記は、「神の民の守り固め」であります。ネヘミヤによる城壁再建の工事には、敵の執拗な妨げがありましたが、その勢力と戦い城壁を完成させたところから、私たちが神の民として霊の戦いがあり、その守り固めをすることについて学びました。

そしてエステル記は、「神の民の存続」と読んだらよいでしょう。神はご自分の御手によって、私たち神の民を滅びから救い出してくださいます。モルデカイがエステルに対して、「このような時のために、あなたがこの王国に来たのだ」と言った、「このような時」とは何であるかをじっくりと見てみたいと思います。

### 1A 民族危機の時

一つ目は、「このような時」とは「民族の危機の時」であります。ユダヤ民族が絶滅するという危

機の時のため、エステルが王宮にいるのだということです。

私たちは前回、3章でハマンという男が王によって重用されていたことを読みました。彼に対して、王の家来たちがひれ伏しましたが、モルデカイだけはひれ伏しませんでした。なぜひれ伏さないのか、と何度も問われるので、モルデカイは「ユダヤ人だから」と答えました。このことをハマンに伝えると、ハマンは憤りに満たされました。そして、その怒りは、モルデカイに手を下すことだけで満足しませんでした。「王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民族を、根絶やしにしようとした。(3:6)」とあります。

そこでハマンは、上手に王を説き伏せて、法令を作らせました。ユダヤ人という名を伏せて、王と異なる法令を持ち、王に逆らう民族がいるので彼らを滅ぼすように、そして滅ぼす者たちに賞金を与えるという法令であります。王は好きなようにしなさいと言い、彼に印鑑の役目を果たす王の指輪を渡しましたが、その書簡には「一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪え」とありました(3:13)。これは取り消すことのできない法令であり、必ず施行されます。

したがってモルデカイがエステルに話した「このような時」とは、自分たちの民族が滅ぼされる危機にあるという時であります。

## **2A 機会の時**

しかし、このような時とはそれだけではありません。二つ目は「機会の時」であります。ユダヤ人の女エステルが、五年前からペルシヤ帝国の王妃になっているのです。私たちは、彼女がこの時のために、王妃ワシュティが王妃の位を剥奪されたことを読みました。この時のために彼女がいなくなり、王が代替りの王妃を王国中から探したのでした。エステルは従兄弟であり養父でもあるモルデカイの言いつけを守り、ユダヤ人であることを他の人に明かしませんでした。そして王妃になったのです。そしてこの時に初めて、彼女が王に自分がユダヤ人であることを明かし、この法令を取り消して下さるよう嘆願することができる機会が与えられているのです。それでモルデカイは、「あなたが、この王国に来たのは、もしかしたらこの時のためかもしれない」と言いました。

このような言葉があります。「人の窮地は神の好機(Man's extremity is God's opportunity)」人が自分たちでは脱却できない困難な時に直面しているので、神がその機会を得て働かれるという意味です。いや、神はご自分が働かれるために、敢えてそのような難局をもたらしておられると言ってもよいでしょう。神はかつて、紅海を分けてイスラエル人を渡らせて、エジプト人を水で滅ぼすために、敢えて山に囲まれた海辺にイスラエル人を宿営させるようにされました。また、ラザロのよみがえりのことを考えてください。イエス様は、ラザロが病に伏しているのに、なおのこと二日待って、それからラザロの家に出かけましたが、その時は死んでから四日経っていました。人にはどうにもできない時に神が働かれて、神が栄光を受けられます。

ですから、私たちは是々非々で物事を判断してはいけません。途中経過で、早まって結論を急いではいけません。悪い知らせがある時も、実は輝かしい結果が待っている可能性があるのです。

ですから、エステルはこの時のために生まれました。神は、この瞬間のためにエステルを用意されました。長い人生が、実は、神の用意されたご計画の重要な一コマのために用意されている事もあるのです。このように私たちの人生は、神のご目的に沿って、神の望まれるままに存在しているのです。もしかしたら、反発されるかもしれません。「そうではないでしょう。私たち自身が輝き、素晴らしい人生を送ることが大事なのではないですか？」いいえ、この世においては捨石のように見えても、それが神の御心であればそれでいいのです。そこに、神の栄光が現われます。神の御心のままに、神の望まれるままに存在することこそが、私たちの存在目的です。「あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。(黙示 4:11)」

### **3A 決断の時**

そしてモルデカイの言った、「この時のためであるかもしれない」という意味は、三つ目、「決断の時」であったと言えます。エステルは、ユダヤ人であることをモルデカイの言いつけ通りに明かさず、しばらくペルシヤの王妃として生きてきました。しかし今、ユダヤ人のために動く決断をしなければいけません。ユダヤ人として、神に選ばれた民として生きる決断を、今、この時にしなければいけないという意味です。

モーセのことを思い出します。彼は、赤ん坊の時にナイル川でパロの娘に拾われて、彼女の養子として育ちました。エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました(使徒 7:22)。しかし、彼は 40 歳の時に、同胞を助ける心を抱いたのです。そのために彼はパロの怒りを買って、そこから出ていかなければいけませんでした。けれどもモーセは、それを由としました。「信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。(ヘブル 11:24-25)」モーセは自らこれを選び取りましたが、エステルは今、どちらにするか選べなければいけなかったのです。

しかしエステルには、実際的な問題がありました。王妃だからと言って、王に対していつでもお願いできる訳ではないのです。王は、自分の願うままに人を玉座のある内庭に召し出します。けれども、そうではなく内庭の中に入れば、その場で護衛によって殺されます。その時に、王が金の笏を差し出せば、命は助かります。けれども、エステルは三十日間、王のところに行くようには召されていません。

しかしモルデカイは、王の前に出ることを躊躇する霊的な問題を取り上げました。まず、「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。」と言っています。エステルは、ペルシヤの王妃として王宮の中に生きています。だから、法令によって全てのユ

ダヤ人が滅ぼされようとも、自分だけは助かると思うこともできました。けれども、モルデカイはそんな甘いものではないと教えています。何らかの形で、彼女がユダヤ人であることが暴かれて、彼女も彼女の家も殺されてしまうだろうということです。

私たちはエステルと同じように、自分は他の人々に襲いかかる災いから助かるだろうというという錯覚を抱きます。世に起こっている、また自分の周りで起こっている災いが、なぜか自分だけは何らかの形で免疫が出来ていて、襲うことはないと思っています。イエス様は、ユダヤ人たちにこのように警告したことがあります。「シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。(ルカ 13:4-5)」

この世の流れの中に生きていくことが、自分にとって生き残っていく道だと思ったら大間違いです。日本全体が、いや世界全体が、ちょうど鍋の水の中に入れられた蛙のようになっています。徐々に、火によって水が温められますが、まだ大したことはない、むしろ心地よかったです。けれども、その温まる速度が緩やかなので自分がのぼせて、ついに煮えたぎって死んでしまうなど考えてもいません。このままでは死んでしまうのに、それでも「いや、私は今のままで生きていく、この世の中に生きていく。他の普通の人と同じように生きていく。」と、今までのやり方にしがみついているのです。

次にモルデカイは、大胆な発言をしました。「もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。」神は、何でもおできになる方です。エステルなしでも、ご自分の計画を成し遂げることがおできになります。神は、アブラハムの子孫からキリストを出し、ダビデの子が神の国を受け継ぐことを約束なさいました。神は御旨を必ず成し遂げられます。ですから、エステルがいなければ、神はユダヤ人を救うことができないと考えたら間違いです。神はご自分の目的を果たされる時に、人を用いられませんが人に拠り頼んでおられません。

私たちは、しばしば自分のしていることは自分にしかできないという錯覚に陥ります。私がおこにいるから、これは私がしなければできないのだとして、それを自分の所有物にするという過ちを犯します。いいえ、神は自分がいなくても、他の人をお立てになります。自分はいくまでも、神に命じられてそこにいる僕にしか過ぎません。神が動かし、神が事を成し遂げられます。そして、私たちが神に用いられるとは、神が私たちを必要としているのではなく、神がなされる恵みの御業に私たちが関わって、そのすばらしさを味わうことができるようにするためです。

さらにモルデカイは、警告を与えます。「しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。」神の約束は必ず実現します。ユダヤ人は救われます。しかし、その約束を信じないのであれば、その約束は実現するのに自分だけは滅びるのです。信じなければ、そのものが無くなると多くの人は思っています。イエス・キリストを信じなければ、イエス・キリストは自分に影響を与えることはない、イエ

ス・キリストは架空の人物になると思っています。いいえ、イエス・キリストは生きておられ、そしてこの方の言われたことはその通りになります。変わるのは、キリストにある永遠の命という約束をその不信仰のゆえに失うということです。

北イスラエルに、エリシャという預言者がいました。彼の時代に、イスラエルに飢饉が起こりました。それだけでなく、シリア軍がエルサレムを包囲して、食糧が首都サマリヤに枯渇しました。激しいインフレが起こり、食べるものがなく、なんと母親は自分の赤ん坊を食べているという有様でした。それでエリシャのところに王は人を送りました。そしてその人にエリシャは言いました。「明日の今頃、サマリヤが食糧で溢れかえる」と。けれどもその人は言いました。「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。(2列王 7:2)」彼は信じなかったのです。それでエリシャは言いました。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」目で見るのですが、食べることはできないのです。

これは、その通りになりました。サマリヤの町の外にいた四人のらい病人がいました。彼らは、町の中に入れない汚れた者とされていた人々です。それで人々の捨てるごみによって生きていました。ところが、そのごみさえ出てきません。このままでは確実に死にます。それで、彼らは包囲しているシリア軍のところに行ったのです。すると神は、彼らの足音をものすごい戦車や馬の音として、シリア軍に聞かせたのです。それでシリア軍は一目散に逃げました。そこには大量の食糧が残されていました。

それで、エリシャの言葉の通りにサマリヤの市場に食糧が大量に並びました。先の、王から遣わされた人は門の管理をしていましたが、人々がなだれ込んできて、彼は踏みつけられて、死んでしまいました。彼は確かに見たのですが、それを食べることはできなかったのです。同じように、信じないことには対価が伴います。神のご計画は実現しても、それに預かれないという対価です。エステルの場合は、このような時に沈黙していれば、ユダヤ人の救いの時に自分や自分の家だけは滅ぼされるということです。

#### **4A 決心の時**

そしてモルデカイの「このような時」の四つ目の意味は、「決心の時」であります。モルデカイのこの言葉を聞いたエステルは、首都シュシャンにいるユダヤ人に三日間、断食をするように呼びかけるようモルデカイに伝えました。そして、自分自身も断食をします。そして王のところに執り成しに行くのですが、彼女は 16 節、「私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」と言いました。つまり、すべてのことを、自分の命さえも神にお任せする時が来たのだ、ということです。

使徒ペテロは、「ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。(1ペテロ 4:19)」と言いました。真実であられる創造者に任せた魂には、平安があります。これまで神の定めに対抗して、心を

騒がせていたところを、「もし死ななければならぬのなら、死ぬ」と決めてしまうのなら、その後どんなことが起こっても心は動じることはありません。そして、主に任せた魂には神のご目的が明らかにされていきます。

思い出すのはヤコブです。彼は、ヨセフがいなくなった後に、飢饉になって食糧をエジプトで買ってきたさいと兄息子たちに言いつけます。けれども、ベニヤミンは連れていかせませんでした。ヨセフを失っていたので、ベニヤミンに何か起こっては自分はやっていけないと思ったのです。けれども、エジプトのお代官様は非常に厳しい方で、一番下の弟を連れてくるまで一人を牢屋に入れて置くとして、シメオンを牢屋に入れました。そのことを息子たちは父に伝えましたが、「ベニヤミンは絶対に連れていかせはしない。」と言い張りました。

けれども、食糧が尽きてきました。それでヤコブが買いに行きなさいというと、「一番下の弟を連れてこなければ、私の顔を見てはいけないと言ったのです。」とユダが説得しました。それでヤコブが主に任せたのです。「全能の神がその方に、あなたがたをあわれませてくださるよう。そしてもうひとりの兄弟とベニヤミンとをあなたがたに返してくださるよう。私も、失うときには、失うのだ。」(創世 43:14)「このエステルという言葉と同じです、「私も、失うときには、失うのだ。」けれども、この決心によってベニヤミンと共に兄たちはエジプトに下ることができ、そして、その厳しいお代官様は実はヨセフ自身であることを知ることになるのです。一切を神に任せる時に、神がご計画を明らかにされます。

主ご自身が、その道を通られました。汗が血のしずくのように地に落ちるような祈りをゲッセマネで捧げられました。「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。(ルカ 22:42)」ヘブル書 5 章 7 節によると、イエス様は泣き叫んでいたそうです。「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」イエス様の聞かれた祈りとは、十字架の死を免れることではなく、死んでもよみがえることでした。このように、イエスご自身も父なる神にご自分の魂をお任せしたことによって、その魂が動じることがなくなっただけでなく、死者からのよみがえりという神のご計画が明らかにされました。

私たちは留まることもできますが、留まれば必ず死にます。信仰によって前に進めば、死ななければいけない危険性がありますが、助かる可能性もあります。先ほどの、サマリヤにおける食糧危機の話では、あの四人のらい病人がこう話しました。「たとい、私たちが町にはいろうと言っても、町はききんなので、私たちはそこで死ななければならぬ。ここにすわっていても死んでしまう。さあ今、アラムの陣営にはいり込もう。もし彼らが私たちを生かしておいてくれるなら、私たちは生きのびられる。もし殺すなら、そのときは死ぬまでのことだ。(2列王 7:4)」

自分が神に任せられない理由は、自分の身に何かが起こるからだいうものがあります。けれども、任せなければ必ず死ぬのです。私たちには、エステルが王宮にいるのと同じように、今の自分の安心できる空間の中に、安心できる生活の中に自分自身を閉じ込めておきたいと願うのです。それで一歩、信仰によって先に踏み出ることを拒みます。しかし、その安逸な空間こそが危険なのです。主の御心の中に、信仰をもって、そして任せる決心をもって踏み出るのです。

## 5A 今の時

いかがでしょうか？エステルに語りかけたモルデカイの言葉は、私たちにも当てはまります。

先だって、あるカルバリーチャペルの若い姉妹が他の何人かと一緒に、新宿駅前で路傍伝道をしました。彼女は礼拝で賛美も導いている子です。ギターを弾きながら福音を伝えました。けれども、その伝道をしてよいかと牧師に彼女が尋ねた時に、牧師は、教会はずっと遠いところにあつて、なぜ近所で行わないで新宿駅なのか？と疑問に思いました。彼女は、自殺についてずっと調べていたそうです。一年のうち、三月に自殺する人が最も多いそうです。そして、一週間のうち月曜日が一番自殺するのだそうです。さらに、東京では新宿駅が、自殺が多いのだそうです。それで、三月の月曜日、新宿駅前で路傍伝道を決行したのです。そこで福音を伝えれば、自殺を考えている人が聞いてくれるかもしれないと思ったのだそうです。

私はそれを聞いて感動しました。今の日本のあらゆる諸問題が、自殺数の多さに集約されているのではないかと私も思っていました。彼女はその重荷を主の前で祈りながら、インターネットで情報を調べて、それで行動に移しました。牧師に相談しながら、御心を探りながら行動に移しました。日本全体が大きなタイタニック号のように、穴が空いていて沈みそうになっています。その時に、私たちは神に選ばれて、召されて、神に仕える者とされました。このような暗き世だからこそ、神が生きて力強く働いてくださいます。暗いからこそ、ますます光を輝かせることができます。

しかし、そこには気づきが必要です。モルデカイがエステルに語ったような気づきが必要です。今の生活を自分自身で守っているものを手放さなければいけません。そして、自分自身の生活の枠組みを壊して、神の御国の幻の中に自分自身を投じる決断が必要です。そこで自分がどうなっても、主に任せていけばよいのだという決心が必要です。そうすれば、神のご計画が目の前ではっきりします。献身した者たちの前には、神ははっきりとご自身の目的を明らかにしてください。